

先週のメッセージ(2022年11月6日) ベン牧師

「労するからこそその祝福」 ヨハネによる福音書 2:1-11

今日の箇所は、カナという地のある人の婚礼での出来事です。

当時の婚礼の宴は1週間ぶっ通しで行われました。その間でぶどう酒を切らしてしまうのは、その家の恥でした。

ぶどう酒を切らして困っている裏方の様子を見かねたのでしょうか、マリヤが事情を知ってイエス様に相談します。イエス様は「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」とおっしゃいます。日本語に訳すと冷たい言い方ですが、「婦人よ」というのは、女性を尊敬して呼びかける言い方です。

マリヤはそれでも召使いたちに、イエス様の言われるとおりにするように言います。イエス様だったら、なんとか助けてくれるに違いないと彼女は思ったのでしょうか。イエス様は召使いたちに、水がめ6つに水を満たすように言われます。1つの水がめは約100ℓくらいです。

召使いは言われた通り、水を水がめに満たし、それを汲んで宴会の世話役のところへ持っていきました。それはなんと、良質のワインになっていたのです。世話役は驚いて花婿を呼び、「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」と言うのです。世話役は、このワインがどこからどうやってきたのかを知りませんでした。花婿の家族が、宴の終盤まで良いワインを取っておいたのだと思ってほめたのです。しかし、水を汲んだ召使いたちは、この良質のワインがどうやってできたかを知っていました。一番驚いたのは彼らでしょう。

イエス様は、これを最初のしるし(メシアとしての証明)として行われました。

召使いたちは、表に出て、皆と楽しむことはできません。裏方に徹し、働くのみです。しかし、その彼らこそがイエス様の栄光を目の当たりにすることができたのです。

私たちはともすると、裏方を任じられると、「なんでだろう」という気持ちになることがあるかもしれません。なんの役にも立っていないとか、報われないと思うかもしれません。しかし、表舞台に立つ人の背後に、どれだけの人々の働きとサポートがあるか計り知れません。例えば、オリンピックの金メダリストの背後にも、そういう裏方の人々の働きがあってこそその金メダルなのです。

教会の礼拝一つとっても、週報を作る人、お花をいける人、掃除をする人等、陰にあって奉仕して下さる人々の奉仕があるからこそ、毎日曜日、礼拝を捧げることができているのです。そのようにして捧げる礼拝は、神様の祝福を受けます。神様の栄光が表される時、その祝福を受けるのは、目に見えないところで奉仕した人たちなのです。

「忠実な良い僕だ。よくやった。」(マタイ 25:21) イエス様は声をかけてくださいます。

私たちはともすれば、目に見えるところだけに心奪われがちですが、どんなことにおいても、陰で働いて下さる方々がいるのです。教会が成長するために、祈り、サポートしてくださっている方々がいるのです。そういう方々の働きを、神様は一つ一つ覚えていてくださっています。

歳をとったから、聖書の知識がないから、時間がないから、と、ということで、主の働きに加わることをやめないでください。どんなに小さくても、小さな奉仕こそなくてはならない奉仕なのです。

台所で働いていたのは、その家の召使いでした。彼らが何をしたかという、水を汲んでかめに満たしただけです。文字通り彼らにやるべき仕事をしたのです。しかし、イエス様の奇跡を目の当たりにしたのは、召使いたちだけでした。表で美味しいものを食べていた人たちは、神様の素晴らしい奇跡を目撃することはできませんでした。彼らが召使いだっただからこそ、この祝福を受けることができたのです。

「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」(Ⅱコリント 15:58)

イエス様のためにすること一つ一つを神様は覚えていてくださり、それに必ず報いて下さるのです。これは神様の約束です。神様のために働く人にとって、貧乏くじなどというものはありません。

神様が与えてくださった奉仕を、喜んで受けるものとなりましょう。労する者だからこそ受ける祝福をいただくようではありませんか。

